

## 介入主義か非介入主義か

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

富士五湖のひとつ西湖で幻の魚クニマスの発見にたずさわった当時の漁協組合長三浦さん（西湖のほとりでレストラン経営）に興味ある話をうかがったことがある。

「ゲームフィッシングが近年盛んとなり、ブラックバスの放流を実施しているが、ブラックバスは肉食でオイカワという小魚を餌としており、ついには食べ尽くしてしまう。すると今度は本来守るべきブラックバス自身の大切な卵まで食べてしまう。だから多くの釣り人を惹きつけようと放流量を増やしてしまうと、かえってブラックバスが減ってしまう。程良いところが肝心です。」

また、同氏は猟も行っており山にイノシシを撃ちに行き、イノシシ肉のほうとう鍋を作る。「イノシシはヘビも食べる。人間がイノシシを捕りすぎるとヘビが増えすぎて山にわけ入った人間が咬まれる。逆にイノシシもヘビを食べ尽くさず、一部は残す知恵を持っている。」

これを聞いていて、自然の摂理に驚くとともに、人間の強欲と浅知恵が合わさるとろくでもない結果を招いてしまうという念を強く持ったことを憶えている。

他方、人間が適切に手を加えなければならぬものもいろいろある。

絶滅が危惧された鳥トキも関係者の努力で保護の動きが実を結びつつある。最近、絶滅危惧種に指定されたニホンウナギも適切な保護対策の必要とされる時が到来するだろう。

これは放っておけば取り返しの付かない事柄には対策が必要なことを意味する。これらは人間が生きものの世界に介入すべきか否かの難しい問題と言えるが、マーケットが中心となっている自由経済の経済運営にも当てはまるものがあると感じる。

為替相場、株式市場、金利変動などに対し、どういう時にどの程度の介入が有効とされるのか。金融機関の破綻に際し、どういう基準で公的救済が必要とされるのか。また産業再生に関し、どういう場合に公的資金での支援が正当化されるのか。景気を浮揚させるために政府自らが必要を作り出すことが必要とされる場合と否とをどう区別するか。

これらは容易に判別することは難しい難問ばかりであるが、介入主義と非介入主義とに分かれて二分法で議論できるほど、わが国経済は単純ではなくなり、また一段とグローバル化が進んでいるのである。

現実的にはケースバイケースで程良いところを見出すしかないのだろうが、最近ともすれば何もかも公的セクターの出番とばかり決め付けがちな風潮が広まっていることに危惧の念を持たざるを得ない。

為替相場も株式相場も変動の理屈づけが当局の一挙手一投足だということのも、マーケットのあるべき姿から言うとおかしい。もっと経済のファンダメンタルな動きが強調されて然るべきである。

危機に陥った信用秩序という社会インフラを守るために、やむを得ず導入した公的資金の利用についても自ずと限界があるはずだ。

景気を絶えず良い状態に置いておきたい気持ちは国民すべてにあるが、それは論理的にも無理な話で、高度成長期ならいざ知らず拡大均衡条件の整わない低成長下では不況があり好況がある姿はある程度避けられない。よって、むやみに好況期にも公的介入で国内需要をかき上げし続けるようなことがあってはならない。

これらの自覚がなければ財政破綻の危機が急速に近づいて来るだろう。